

各年代のネット利用の認識・感覚のズレに関する調査研究

塩田真吾*1・酒井郷平*2・松永由弥子*3・佐藤敦*4・井上千春*4

Email: esshiot@ipc.shizuoka.ac.jp

*1: 静岡大学 教育学部

*2: 静岡大学大学院 教育学研究科

*3: 静岡産業大学 情報学部

*4: 静岡県教育委員会 社会教育課

◎Key Words ネット利用, 認識・感覚のズレ, 情報モラル教育

1. はじめに

現在、ネットに起因する子どもたちのトラブル事例が多く報告されている。内閣府(2015)「青少年のインターネット利用環境実態調査」では、小学生の61.3%、中学生の80.3%、高校生の97.7%がスマホやゲーム機から日常的にネットを利用していることが明らかとなっており、こうしたネット利用率の高さがトラブルの要因に挙げられている。

こうしたトラブルを防ぐためには、学校での情報モラル教育の推進だけでなく、地域、家庭との連携による情報モラル教育の推進が必要となる。特に、家庭での情報モラル教育の有効な方法のひとつが「家庭でのルールづくり」である。先に挙げた「青少年のインターネット利用環境実態調査」では、小中高校生の保護者の81.0%が、「家庭にルールがある」と回答しており、トラブルを防ぐための家庭でのルールづくりが普及していることがわかる。しかし、同じ質問項目に子ども自身が回答したところ、「家庭にルールがある」と回答した小中高校生は60.8%となっている。詳しく見ていくと、「家庭にルールがある」と回答した小学生の保護者は88.7%に対して小学生自身は73.7%、「家庭にルールがある」と回答した中学生の保護者は85.5%に対して中学生自身は65.1%、「家庭にルールがある」と回答した高校生の保護者は71.4%に対して高校生自身は48.3%と、各年代での認識のズレ(ギャップ)が見られる。保護者は「家庭にルールがあるから大丈夫」と安心している一方で、子どもはそれらをルールとして認識していないという可能性が考えられる。

では、こうした認識のズレは、なぜ起こるのだろうか。もちろん、保護者がルールを口頭で確認したため、子どもが忘れてしまうなど、「保護者が(ルールを)伝えたつもり」になっていることが原因の1つとして考えられる。しかし、ルールを明示した場合でも、認識のズレが起きる場合もある。例えば、「スマホを夜遅くまで使わないようにする」、「ゲームやネットを使いすぎない」というルールを作ったと考えてみよう。この場合、「夜遅く」や「使いすぎ」という言葉でイメージされる「夜遅い時間」や「使いすぎと感ずる時間」は人によってズレが生じる可能性がある。保護者は、「使いすぎない」というルールがあると考える一方で、子ども自身は「使いすぎでないから大丈夫」とルール

を守ることに意識が向かず、結果的に「ルールがない(と同じこと)」と考えてしまうのである。子どもと大人、もしくは子ども同士、大人同士にどんな認識のズレがあるかをあらかじめ意識しておくことは、こうしたルールづくりはもちろんこと、今後、情報モラル教育を推進し、青少年を支援していくためにも重要な視点であろう。先行研究を見てみると、子どもの利用状況の調査や保護者の意識の調査はあるものの、各年代のネット利用に関する認識・感覚のズレを調査するものは見られなかった。

そこで本研究では、こうした認識のズレを解決するために、各年代におけるネット利用の認識・感覚のズレに関する調査を実施し、分析と考察を行う。

2. 調査の概要

本調査では、静岡県内の幼稚園・保育園の保護者、小・中・高校生、学生、企業等の従業員・職員、成人を対象とした。調査紙の配布数は3558件で、回収数は2720件、回収率は76.4%である。実施時期は2015年11月～12月である。回答者の内訳を表1に示す。

表1 各年代別・性別・学校種別の回答者数(人)

	10歳代	1197
	20歳代	429
	30歳代	355
年代別	40歳代	148
	50歳代	75
	60歳代	60
	70歳以上・無回答	6
性別	男性	1151
	女性	1564
	無回答	5
学校種別	小学生	450
	中学生	492
	高校生	521
	学生(短大・大学・大学院・専門)	409

また、学校種別にネット利用の多/少を示した回答者数を表2示す。「あなたは、平日、ネットやゲームをどのくらいの時間使用していますか」という質問項目に対して、平日3時間以上を「ネット利用多」、平日30

分以下を「ネット利用少」とした。

表2 学校種別ネット利用 多/少の回答者数 (人)

小学生	ネット利用 多	59
	ネット利用 少	212
中学生	ネット利用 多	116
	ネット利用 少	111
高校生	ネット利用 多	162
	ネット利用 少	87

3. 調査の結果 (世代別)

まず、各年代のネット利用に関する認識・感覚のズレについて見ていくと、各年代によって大きく認識のズレがみられたものについては、「使いすぎ」だと感じる時間、ネットやスマホを「触らなくても気にならない」と感じる時間、「夜おそい」と感じる時間、中学生のスマホ・ケータイの所持率の予想が挙げられる。

特に、「使いすぎ」では、30代の66.5%、40代の68.7%が「1時間以上・2時間以上」を「使いすぎ」と回答しているのに対して、10代では29.6%、20代では28.8%しか「1時間以上・2時間以上」を「使いすぎ」と回答しておらず、ズレが見られる(図1)。

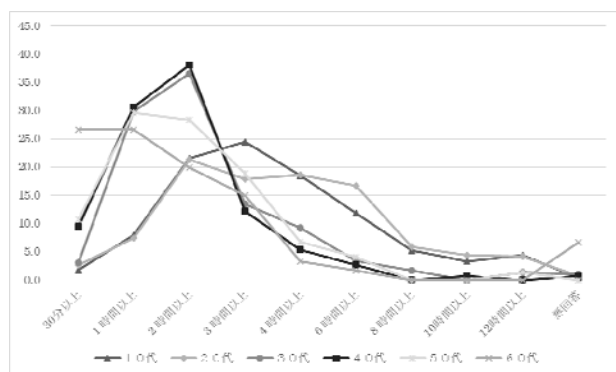


図1 ネットやゲームを「使いすぎ」だと感じる時間 (世代別)

また、「ケータイ・スマホを持っても良い」と思う年齢については、10代・20代は「中学生から」と回答している割合が高いのに対して、30代、40代、50代、60代については「高校生から」と回答している割合が高く、ズレが見られた(図2)。

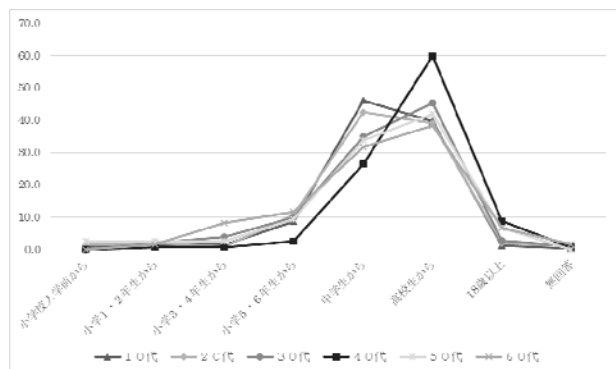


図2 「ケータイ・スマホを持っても良い」と思う年齢 (世代別)

さらに、誰がネットやスマホ・ケータイのことを教えるとよいと思うかについては、10代を見ていくと「保護者」や「学校の先生」と回答した割合が他の世代に比べて低く、「警察」と回答した割合が他の世代に比べて高い。特に、小中高校生のネット利用の多い/少ないで見ていくと、ネット利用の少ない子どもよりも多い子どもの方が「保護者」や「学校の先生」と回答した割合が少ない。こうした子どもたちにとっては、「自分たちの方が先生や親より詳しい」という意識があることが考えられる。

4. 調査の結果 (学校種・ネット利用時間別)

平日のネット利用時間によっても「使いすぎ」と感じる時間に大きなズレが見られた。例えば、ネット利用が少ない中学生、高校生の「使いすぎ」と感じる時間は、「2時間以上」が中学生の36.0%、高校生の39.1%ともっとも多く回答されたのに対して、ネット利用が多い中学生は「6時間以上」が28.6%、「8時間以上」が25.0%、ネット利用が多い高校生は「6時間以上」が21.9%、「12時間以上」が23.3%と回答している(図3)。

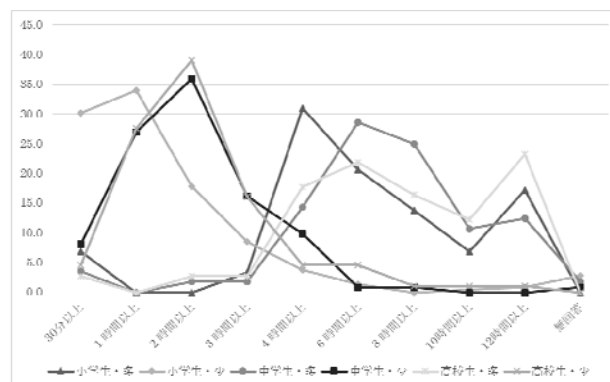


図3 ネットやゲームを「使いすぎ」だと感じる時間 (学校種・ネット利用時間別)

5. おわりに

本調査では、各年代だけでなく、利用時間による「使いすぎ」に関する認識・感覚のズレが明らかとなった。今後、ルールづくりを行う際には、こうした「使いすぎ」に関する認識・感覚のズレを踏まえた指導や支援が課題となるであろう。

付記

本研究は、静岡県青少年問題協議会が取り組む「ICT社会における子ども・若者の人間関係づくりへの支援」の成果の一部を示したものである。

参考文献

- (1) 内閣府「青少年のインターネット利用環境実態調査(2015)」
- (2) 総務省「平成27年版情報通信白書(2015)」
- (3) 齋藤長行「青少年のインターネットの利用実態を基にした啓発教育政策の評価と方向性に関する研究」情報処理学会「研究報告コンピュータと教育」2013-CE-120(7), pp.1-10, (2013)